

## 木崎愛吉旧蔵「薬師寺東塔？」拓本と命がけの手拓作業

著者	西本 昌弘
雑誌名	阡陵：関西大学博物館彙報
巻	82
ページ	2-3
発行年	2021-03-31
URL	<a href="http://doi.org/10.32286/00023761">http://doi.org/10.32286/00023761</a>

# 木崎愛吉旧蔵「薬師寺東塔檨」 拓本と命がけの手拓作業

西本昌弘

薬師寺東塔檨銘は東塔の銅製檨管に刻まれた銘文である。薬師寺が天武天皇の「即位八年庚辰之歳」（680年）に中宮（鸕野皇女）不余のため創建され、天武没後に大上天皇（持統）が完成させたことを記す。『日本書紀』は天武元年を壬申年（672）とし、薬師寺の創建を天武9年のこととするが、この檨銘では天武元年は癸酉年（673）となるため、大友皇子（弘文天皇）の即位を裏付ける資料として注目された。文中に誤字があることから、本薬師寺の塔の銘文を模刻したものと考えられている（東野治之『日本古代木簡の研究』塙書房、1983年、236頁）。

檨は仏塔の心柱を意味する。薬師寺東塔の場合、屋上に露出した心柱を覆う銅管の基部に銘文が刻まれており、地上から約24mの高所に位置する。寛政4年（1792）、柴野栗山に随行して山城・大和の寺社所蔵古文書類を調査した屋代弘賢は、薬師寺東塔の檨銘を見るため塔頂に登ろうとした。栗山は「危シ、止メヨ、父母ノ遺体ヲ憶ハスヤ」（父母が残してくれた身体のことを考えよ）と制止したが、弘賢は屋根に登って筆を執ったという（『三宅米吉著述集』下、同刊行会、1929年、16-17頁）。



図1 木崎愛吉旧蔵「薬師寺東塔檨」拓本

関西大学博物館所蔵の本山コレクションには木崎愛吉（好尚）旧蔵の金石文拓本資料が含まれているが、その中の「薬師寺東塔檨」（A6-70）も生命の危険を顧みず手拓されたものである。本拓本の右下には「大正二年八月十七日 薬師寺東塔檨」と墨書するが、木崎はこの拓本を『大日本金石志』附図に掲載する際に、

薬師寺東塔檨一武岡氏二令息手拓所贈と記し、手拓事情の一端を明らかにしている。

また、木崎は『大日本金石志』第一巻に「薬師寺東塔檨記」と題してその釈文と解説を記述しているが、その最後に「塔頂の刻文を手拓するのは命がけの仕事である」として、屋代弘賢の逸話を紹介したのちに、木崎自身の手拓時の状況を次のように書き留めている。

わたくしも拓本が得たさに、塔の下から遙に九輪を見上げたものゝ、何うしても脚がふるへるのを感じぬ訳にはゆかなかつたが、幸に同行の武岡豊太氏の二令息が、身軽に攀じ上り、巧みに手拓して下すつたのである…。

同じく木崎旧蔵「薬師寺仏足石並銘」（A6-1-1）のうち「正面」拓本の左下にも、「大正二年八月十七日 与織田鷹洲翁武岡楽山父子共拓」と墨書があるので、大正2年（1913）8月17日、木崎は織田鷹洲（完之）や武岡乐山（豊太）父子とともに薬師寺を訪れ、仏足石と東塔檨の拓本を採拓したこと、とくに後者は武岡の二子が塔に登って手拓したことがわかる。



図2 木崎愛吉旧蔵「薬師寺仏足石並銘」拓本（正面）添書

織田完之（1842-1923）は三河出身の官僚で農業史家。内務省・農商務省で農書の調査・収集や『大日本農史』の編修にあたった。印旛沼干拓事業に尽力し、佐藤信淵・平将門の研究でも知られる。武岡豊太（1864-

1931)は淡路出身の事業家。湊川改修株式会社で改修工事を担当、湊川の付け替え工事を完成させ、新開地を開発した。勤王志士の顕彰、浮世絵の蒐集につとめ、和歌や書をよくした。

このように木崎所持の「薬師寺東塔檨」拓本は武岡豊太の二子が手拓したものであったが、その武岡豊太旧蔵の東塔檨銘拓本を東野治之氏(奈良大学名誉教授)が所蔵しておられることを、東野氏本人から教えていただいた。東野氏所蔵拓本には次のような長文の箱裏書が付されており、この拓本が手拓された際の状況が詳細に記録されていて貴重である(以下、釈文には適宜句読点を加えた)。

今茲八月十七日、好尚木崎愛吉君と南都の舊蹟を訪はむとし、偶来宿の鷹洲織田完之翁を誘ひ、博三四郎の二兄及其學友竹林嘉一郎を携へ、先薬師寺に到る。佛石跡を拓す。塔尖を望みて其檨銘を得んと欲し、寺僧に謀る。曰、避雷針の為屋上に上るべき設備ありと。則開扉を請ひ二兄を嗾し衣を脱せしめ、器具と水とを腰に纏して登らしむ。二兄曰、若誤りて死せは身を金石文に獻せしと傳へむことを遺言し結束して行く。而して嘉一郎は他人の児なり。危きを共にせしむへからず。塔の上層に至りて待つへしと命す。既にして二兄登攀して拓搨す。嘉一郎も遂に上りて共に労に服す。得る處三葉。乃木崎氏に頒ち、其一葉を嘉一郎に與へて記念となす。抑此塔は天武天皇即位八年白鳳庚辰にして、今より千二百三十五年前に當り、特別の形式にして、内外建築學上の珎とする處、近年是を取崩し、材料を補足して以て原形に復せらる。國費を要すること巨萬に及ふといふ。實に保護建造物中の白眉なり。而して此檨銘は淳仁天皇の父君なる舍人親王の御筆に成る。錦上の花といふへし。茲に事實を記述して児等か先途の参考となす。

大正二年初冬於兵庫西出街之僑居

淡州 樂山武岡豊識 樂山

これによると、木崎・武岡・織田の3名は武岡の二兄(博三と四郎)とその学友竹林嘉一郎を伴い、合わせて6名で薬師寺を訪れ、まず仏石跡(仏足石)、次に東塔檨銘の順で拓本を採取した。東塔には二兄が決死の覚悟で登攀し、



図3 武岡豊太旧蔵「薬師寺東塔檨銘」拓本、箱裏書(部分)

嘉一郎も協力して、檨銘の拓本を計3葉手拓し、各1葉を木崎と嘉一郎に分け与えたという。武岡豊太のもとに残された1葉が東野氏所蔵の拓本と考えられる。武岡は同年の初冬に採拓時の事実を記述して、「児等か先途の参考」とした。

こうした採拓事情を知った上で、木崎旧蔵の「薬師寺東塔檨」拓本をながめてみると、通常の拓本とは異なり、文字の刻まれた箇所のみを墨を塗り、効率よく手拓していることに気づく。少年たちは墨と水を節約しながら急いで3葉の拓本を手拓したのであろう。そのときの様子が目に浮かぶようである。成人後に「身を金石文に獻」じた者はいなかったが、武岡博三・武岡四郎・竹林嘉一郎の3名はそれぞれ宮内省・大林組・通信省

などに入って活躍した。彼らが少年期に命がけで薬師寺東塔上に登った経験は、「先途の参考」になったであろうか。

[謝辞] 架蔵の武岡豊太旧蔵拓本の画像をお送り下さり、拙稿で紹介することをお許しいただいた東野治之氏のご厚意と、箱裏書の釈文作成時にご教示下さった宮内庁書陵部の高橋勝浩氏のご厚情に、心より感謝申し上げます。

博物館長 文学部教授